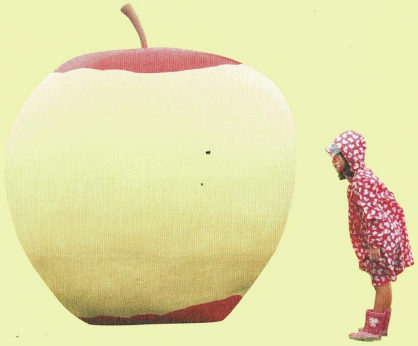


小笠原圭吾《pop dot project》2017

めぐるアート静岡

まち、ひと、とき、すぶ

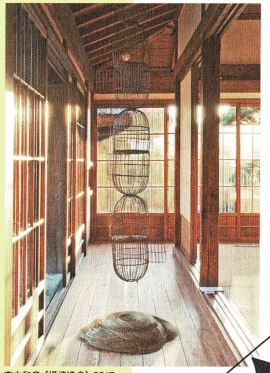
池島康輔
《死肉貪欲》2014

2017
10.17 tue
11.5 sun
ヒロバのみ10.14(土)／11.12(日)

千葉広一《駅前広場》2017

遠藤美香《芝生》2013

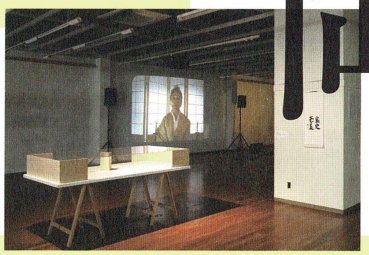
岩野勝人
千葉広一
小笠原圭吾
池島康輔
遠藤美香
奈木和彦
渡辺真也



奈木和彦《提婆達多》2017

東静岡アート＆スポーツ／ヒロバ
静岡県立美術館
静岡市美術館
中勘助文学記念館
村上開明堂七間町第2ビル

岩野勝人
《キリン・キリン》2017



渡辺真也《哀史奄美》2017

2017/10.17(TUE)/11.5(SUN)
静岡県立美術館

池島康輔

彫刻家／浜松市在住

1983年　浜松市生まれ
2008年　多摩美術大学美術学部彫刻学科 卒業
2010年　東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了

2012年　個展「因縁」(成山画廊／東京)
2014年　個展「泡沫夢幻」(成山画廊／東京)
2016年　「彫刻―気概と意外」(東京藝術大学大学美術館陳列館／東京)
2016年　個展「Cerasus」(成山画廊／東京)

西欧的人体解釈と、「彫り物」のハイブリディティ

県立美術館では、浜松在住の彫刻家、池島康輔を選び、エントランスと、ロダン館に、木彫７点を展示した。池島の木彫は、西洋由来の人体解釈と日本の伝統的な「彫り物」の技を掛け合わせた、ハイブリッドな魅力を備えている。展覧会では、池島作品の特徴を浮き上がらせることを目的に、館内の複数の空間に作品を展示した。

エントランスホールに設置した、若い男性の裸体像《メメント・モリ》は、池島が、大学院の修了作品として発表した作品である。均整が取れた、若く美しい肉体が、「自分が必ず死ぬことを忘れるな」という趣旨のタイトルと響き合い、生命感が際立っている。手足が長く、細身の男性像は、体重を右脚にかけ、反対の脚を後ろに振り上げ、重力を感じさせず軽やかに立っている。頭頂から背中、尻にかけてのラインがS字カーブを描き、ダイナミックなねじりを効かせている。池島は、この像を、平安時代前期の仏像彫刻に良くみられる、頭部と体幹部を一つの木材から彫り出す一木造りの技を用いて表している。西洋古典に由来するポーズを、日本の伝統的な木彫の技を駆使して作り出している点が、本作の大きな特徴といえるだろう。足元の台座に表された唐草模様は、後期ゴシック時代の木彫の巨匠リーメンシュナイダーの祭壇彫刻から引用したもので、美術史を遡っての木彫表現の探求の跡がうかがえる。

ロダン館に展示した女性像《月喰》は、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いたとされる《レダと白鳥》のレダのポーズを想起させ、ここからも、作家の西洋古典に倣う態度を読みとることができる。本展では、《月喰》を、ロダンの《永遠の休息の精》の隣に並ぶように設置した。足を交差し、左足にほとんど体重をかけて、極めて危うい均衡のもとに立つロダンのブロンズ作品と見比べた時、鑑賞者は、ロダンの斬新な表現に改めて気づかされる一方で、両作品の表面の仕上げの違いに気が付いた事だろう。ロダンは、モデリングの段階で、荒く付けられた粘土の形を、そのままブロンズに鋳造し、大胆にも表面に残しているのに対し、《月喰》の女性像の木肌は、実に細やかである。仏像を彷彿とさせる表面は、鑿だけで刻み出しており、ここからは、作者の意識が、表面の隅々に宿っていることに気が付く。女性像の右腕に留まるフクロウには「彫り物」の学習の成果が見事に表れている。

西欧的な人体解釈を徹底して学んだ池島が、日本の木彫の系譜に、自己の表現を接続させたいという思いを募らせ、「彫り物」に興味を示すようになったのは、大学卒業後のことである。幼少の頃から生活の中で目にしてきた、地元笠井町の春日神社の建築装飾や、遠州地方の祭りの屋台彫刻の魅力を再発見した池島は、その技を職人との個人的な交流や独学により身につけてきた。名品コーナー左には、近年、池島が手がけた遠州地方の祭りの屋台彫刻から、「正面御簾脇」と「正面脇障子」を、中央にはイノシシの小型像《瞼(けん)》を、左には、タコを表した《戝陋(せんろう)》を展示した。イノシシのヒズメや毛並みは写実的で、細工の細かさや作品サイズからは、床の間の置物を想起させる。《戝陋(せんろう)》の血管が浮き出た肉感的な体や、吸盤は本物のタコのようである。いずれも木彫の表現の独自の探求の成果が活きている。

川谷承子(静岡県立美術館 上席学芸員)

アーティスト・インタビュー

木彫の延長線上に立つ

祭りの屋台の飾りが彫刻につながる

僕は芸術系の高校に通っていました。2年生のときに専攻を油絵にするか、彫刻にするか迷って、選んだのが彫刻。美大で彫刻科に入り、ひと通りの素材を扱う中で自分の中で木彫が腑に落ちました。同時に、地元の祭りに登場する屋台の彫り物を子どもの頃からずっと見ていて、アカデミックな分野ではそうした屋台や社寺建築に取り付けられている彫り物が、彫刻の系譜として扱われないことに対するジレンマを感じていました。

大学の頃のモチーフは人体が多かったです。自分が人間だからこそ、表に出てこない内面的な感情を残したいと。素材の木も元々地面に生えていたものが切り取られ、そこから新しい作品が生まれる。それが生々しくて、人体的解釈の興味、解釈、フォルムの魅力や面白さもあり取り組んでいました。

もちろん、ロダンの影響も受けました。ロダンの作品は写実的な見え方もしますが、自分のカタチにしている凄さがあります。ポーズ、全体のねじれに感情がにじみ出ていて、それがモデルの人となりなのか、ロダンの感情なのか…。自分も作品に感情を表現したいと強く意識をしています。

生命の意味、そして「拳禅一如」

芸大大学院の修了制作は、「メメント・モリ」(死を想え)というタイトルです。人間の持っている命のはかなさ、危うさ、繊細な内面性を出したかった。そして、人体のねじれ、木取りの複雑さ、当時の自分の技量の最高のものをつくろうと、全体構造に凝りました。浮遊感、重力を感じさせないことで、存在のはかなさを表現しています。

大学院を出てからは、動物や動物と人間の合体などもモチーフにしています。動物の場合、意味合いやイメージが大事です。例えば、ハイエナは死体を食べて生きる。生物の連鎖、輪廻が制作する上で、グロテスクも含めて生命表現が面白かったので、「死肉貪獣」を作品にしました。今でも、自分が何で生きているのかを考えて制作をしています。

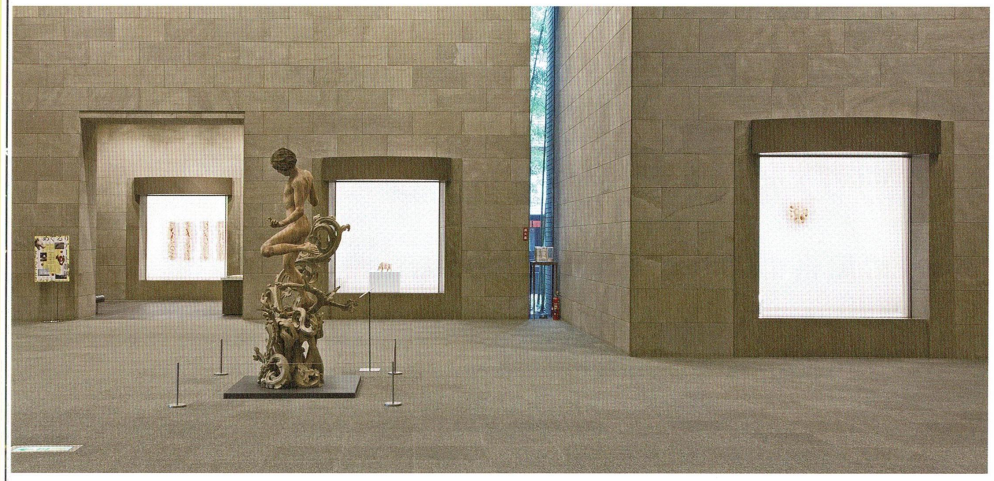
「ダーマ」(達磨大師)シリーズは、高校時代まで取り組んだ少林寺拳法がきっかけです。ダーマとは、サンスクリット語で、「法」「宇宙」「秩序」といった意味合いがあり、「達磨」の語源であるとも言われます。達磨の考え方は少林寺拳法の基本理念の元になっていて、その中の一つに「拳禅一如」の教えがあります。肉体(拳)と精神(禅)を同時に鍛えなくてはいけない。それをダーマのカタチにすることで表現し、西洋的な人体解釈に日本の伝統的な木彫の技術を取り入れながら完成させました。

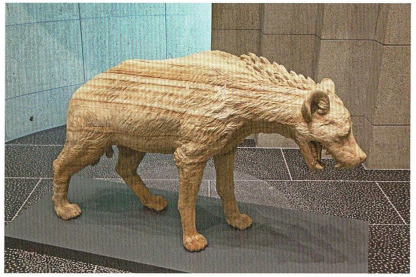
伝統的な木彫技術、職人気質を作品の中に

めぐるりアートでは、ロダン館のある県立美術館が展示会場になるので、ロダンの文脈と僕が今制作している日本の木彫としての文脈の対比をしようと思います。明治維新により近代彫刻がスタートし、ロダニズムが入ってきたことで日本彫刻は大きく動きました。日本では、それまで仏像や彫り物などをつくる職人の時代がつづいてきましたが、ロダンの技術がそれ以降の彫刻の価値観を限定してしまい、日本のアカデミックな分野では木彫が廃れていきました。

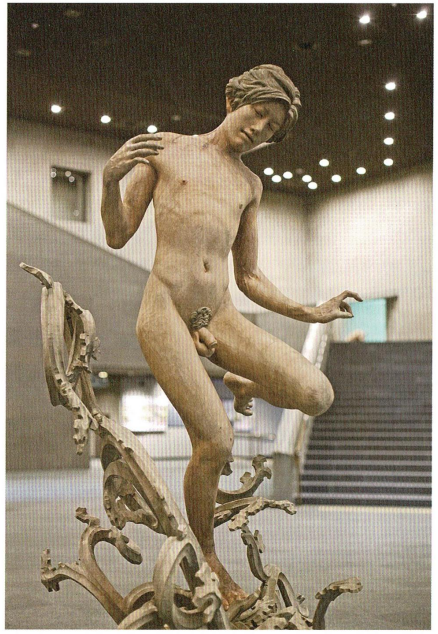
そんな時代背景とともに、伝統的な木彫の技術、日本の職人気質みたいな考えがあることを作品を通して伝えたい。この機会を与えられたとき、明治以降に置き忘れられたような木彫の文脈に自分自身を置いて、しっかりロダンと対比してみたいと思いました。

前述した作品を含め8作品をエントランス、ロダン館等で展示します。近代の新しい彫刻の流れを自分の中でどう咀嚼し、日本の伝統的な要素を加えて作り上げているか。ロダン作品と比べてして、ご覧ください。





《死肉貪獣》2014



《メメント・モリ》2010

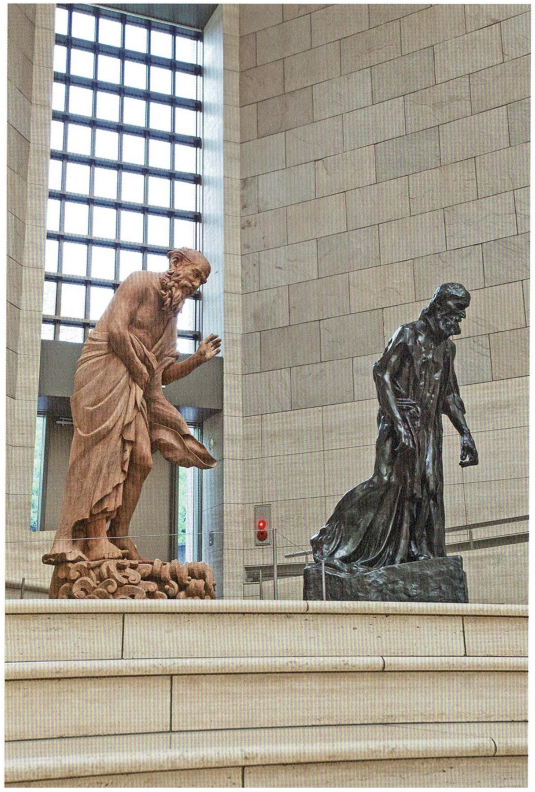
2017/10.17(Tue)/11.5(Sun)

静岡県立美術館

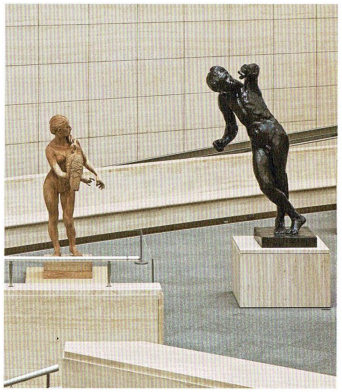
池島康輔

エントランスホールには、特徴的な台座のついた若い男性の裸体像《メメント・モリ》を、また名品コーナーには、近年、池島が手がけた遠州地方の祭りの屋台彫刻から、「正面御簾脇」と「正面脇障子」ほか、置物を思わせる小型の木彫2点を展示した。階段の踊り場には、作家が生命の循環に想いを巡らし制作した《死肉貪獣(ハイエナ)》を、ロダン館には、ロダンの3つのブロンズ作品と対比させるように、大型の人体彫刻3点を展示した。

《木花咲耶姫》2016



《ダーマ》2010



《月喰》2014